様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００６８８

研究課題名（和文）『ヨーロッパ言語共通参照枠』に関する批判的言説の学説史的考察

研究課題名（英文）Historical study on the critical discourse on CEFR

研究代表者
西山　教行（NISHIYAMA, Noriyuki）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：３０３１３４９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究はCEFRに関わる批判的言説の学説史的考察をめざす。日本でも2004年に翻訳が刊行され好意的に受容されてきた。しかしヨーロッパではCEFRそのものに対する言語教育学からの建設的な批判が投じられている。本研究は欧州におけるCEFRの批判的言説を学説史の中から検証し，その妥当性を精査し，日本社会へ向けたCEFRの批判的受容を目指す。そのために、ドイツ語圏，フランス語圏，英語圏の批判的言説を学説史の観点から網羅的に調査し、批判的言説とCEFR増補版の比較分析を行い，その対応を考察した。これらの成果は国際研究集会ならびに研究会、書籍の刊行によって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究はこれまで肯定的な評価ばかりで、批判的な検討が行われてこなかったCEFRについて批判的、ならびに実証的研究を行うことにより、日本という異なる社会的政治的文脈におけるCEFRの受容の可能性と問題点を解明することができた。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to examine the academic history of critical discourse on the CEFR. In Japan, a translation of the CEFR was published in 2004 and has been favourably received. In Europe, however, the CEFR itself has been subject to constructive criticism from language pedagogy. This study examines the critical discourse of the CEFR in Europe from the perspective of academic history, scrutinises its validity and aims for a critical acceptance of the CEFR in Japanese society. For this purpose, critical discourse in German, French and English-speaking countries was comprehensively investigated from the perspective of the history of academic discourse, and a comparative analysis of the critical discourse and the CEFR Supplement was carried out to examine the correspondence between them. These results were illustrated through international research conferences and workshops, and through the publication of a book.

研究分野：言語政策、外国語教育学

キーワード：CEFR　文脈化　学説史研究　言説分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は，欧州評議会が2001年に公開した『ヨーロッパ言語共通参照枠』（以下CEFRと略記）に関する批判的言説を学説史の観点から解明することを目指した。

CEFRとは，EUと並ぶヨーロッパの国際機関である欧州評議会が2001年に公開した外国語教育の学習・教育・評価のための教育資材であり，1）冷戦終結後の東欧の教育の民主化，2）多様化する英語の能力試験免状の評価基準の作成，3）欧州評議会が1960年代から展開してきた言語教育政策の総括，などを背景として作成された。

その主要な目的は，1）ヨーロッパ域内の市民や学生の流動性を高めるよう外国語能力に共通の指標を作成すること，2）ヨーロッパ人が母語に加えて複数の言語を習得し，相互理解を推進するための複言語・複文化主義を振興すること，などである。

CEFRは2004年に日本語版が刊行され，現在では全世界で40の言語によって翻訳され，世界の言語教育の主流を形成しつつある。日本でも，これに着想を得て，日本語教育に関わるJFスタンダードや英語教育の指標を標榜するCEFR-Jといった個別言語の評価装置が作成された。さらにCEFRは中等教育にも多大の影響を与え，新学習指導要領にも例示的能力記述文を指す「～できるようにする」という表現で到達目標が提示され，CEFRの特徴の一つである5技能も「聞くこと，読むこと，話すこと（やりとり），話すこと（発表），書くこと」の5つの領域として統合されている。また大学の外国語教育でも共通参照レベルに基づく到達目標の設定や，教材開発の作成指針に活用する例は年を追うごとに増加している。これらの事例はいずれもCEFRが日本の言語教育界で好意的に受け止められ，評価されていることを示している。とはいえ，CEFRとは一点の瑕疵なき教育資材だろうか。これまで日本では，CEFRの問題点はほとんど討議されたこともなければ，日本の研究者がCEFRを直接に批判したこともなく，もっぱらCEFRを完璧なモデルとして受容している。しかしながらヨーロッパにおける言語教育の研究者は両手を挙げてこれに賛同し，賞賛してきたわけではない。そこには，テクニカルなレベルから言語教育の本質に迫る批判までさまざまなレベルでの方法論的次元での議論が展開されている。その中で2015年以降，欧州評議会においてはCEFR増補版計画が起こり，著者の一人D. Costeが媒介能力に関する予備調査論文を公開した。CEFRは，媒介能力を通訳や翻訳など言語に関わる事項について言及するものの，例示的能力記述文は開発していなかった。そこでCoste & Cavalli(2015)は媒介能力の言語教育学的意義を刷新し，学校教育の核心に位置づけた。申請者はこのような研究動向をいち早く取り上げ，問題の所在を指摘してきた。これを受けて，2016年にはCEFRの著者の一人であるNorth & Piccardo(2016a, b)がCEFR増補版（パイロット版）と媒介能力の能力記述文など，これまでのCRFRに欠如していた項目（A1レベルの能力記述文の追加ならびにレベルの細分化，Cレベルの能力記述文の開発など）を開発し，2017年9月にはCEFR増補版（英語暫定版）が公開された。

そもそもCEFRとは盲目的な導入の対象ではなく批判的導入の対象であり，導入する国や地域の教育文化や社会環境への文脈化が欠かせない。ここでの文脈化とは，導入国への国語などへの翻訳を意味するだけではない。その国や地域の教育文化の伝統や制度など，さらには学習者や教師の特性を考慮に入れ，装置の本質をゆがめることなく，最適化する作業を指す。このような意味で，CEFRに関する批判的考察は文脈化とともに，言語教育を深化させる要因となる。申請者はCEFRの文脈化をテーマとして2010年に国際研究集会を開催し，2011年

には共同研究の成果を国外に発信してきた。それにもかかわらず，これまで日本ではCEFRに内在する問題点を解明する体系的な研究が行われてこなかった。そのためにもCEFRに対する批判的考察を展開する必要があった。

２．研究の目的

本研究は，これまでCEFRの批判的受容を論究してきた申請者を代表として，日本を始めとする国際社会が好意的に受容してきたCEFRを巡る批判的言説を学説史的観点より検討しCEFRの批判的受容を探った。日本ではCEFRの記述が難解で容易に理解できないという批判がしばしば指摘されているが，これは日本だけの現象ではない。しかし，CEFRの唱える言語教育観に関する疑義や例示的能力記述文そのものの妥当性，CEFRの作成に当たって依拠した先行研究があまりに英語による先行文献に偏向していることなど，ヨーロッパの研究者が提起したようなCEFRの本質に肉薄する疑問点は提出されておらず，討議されてもいない。外国で製造された製品を輸入する場合，その製品はすでに完成されたものであり，そこに瑕疵はなく，その製品をうまく取り扱うことができなければ，その責任は製品そのものではなく，受容者の側にある。このように舶来品をいわば盲目的に尊ぶ態度は，言語教育学をめぐるパラダイムにおいても無縁ではなく，海外で生み出された教育思想そのものの欠陥や難点を指摘することは稀である。
本研究の独自性は，これまでの申請者の研究成果を踏まえて，このような日本の研究者の固定観念をいったん留保し，1）国外で展開してきたCEFRそのものに関する批判的言説を検証し，CEFRの限界や制約を解明する必要がある。2）その上で，2017年に公開されたCEFR増補版がこれらの疑問や批判に答えているかを精査する。3）批判に対応していない場合，日本の研究者としてどのような回答を用意することができるのかを検討した。この3段階の検証と考察により，CEFRの貢献や制約，限界を解明し，日本の言語教育へ向けたCEFRの文脈化へ向けて新たな一歩を踏み出すことができた。

３．研究の方法
本研究は，ドイツ語圏，フランス語圏および英語圏において展開したCEFRに関する批判的言説を文献調査ならびに聞き取り調査により解明する。ドイツ語圏については2002年の研究集会に参加した研究者の言説を中心にその後の展開をたどり，聞き取り調査を実施した。この研究集会では19名の研究者が研究報告を行っているが，その後，現在に到るまでの研究動向を時系列を追って検証し，批判的言説の深化や変化を解明し，論点を整理する。分担研究者はいずれもCEFRの関連研究で重要な成果を上げており，ドイツ語圏の研究交流の実績があるため，文献調査や聞き取り調査にも支障はない。
フランス語圏についてはMaurer(2011)とAdami et André (2015)だけではなく，CEFR増補版計画に対する批判が3つの学術団体から提出されている。そこで，それらの批判を精査し，1）CEFRの提示する評価をはじめとする教育装置への批判，2）複言語主義をめぐる言説への批判，3）欧州評議会の言語教育政策への批判のように論点を整理する。フランスの学術団体からの批判は，CEFRの提示する言語教育学の規範性に向けられている。申請者はこれまでの研究により，ヨーロッパでの言語教育政策や複言語主義の動態を解明してきたが，その中から批判の論点も把握してきた。
英語圏についても，CEFRをめぐる教育学的批判の展開を追求するが，批判がほとんど見当たらない場合，その原因をも追及する。Riley(2015)の主張するように，CEFRが複言語主義

を唱えながらも実質的には英語教育の独占的な推進装置として作用しているのであれば，CEFRに対する批判は英語単一言語主義への批判として展開することになる。その点で，複言語主義と英語教育の関係を正面から検証し，CEFR増補版が英語単一言語主義に対する批判を乗り越え，複言語教育を拓くか，あるいは英語教育に対して特別な措置を執っていないのかを検証する。

４．研究成果

本研究からは 3 冊の論文集を研究成果として刊行することができた。『CEFR の理念と現実-理念編　言語政策からの考察』ならびに『CEFR の理念と現実-実践編　教育現場へのインパクト』（くろしお出版 2021 年）は 2019 年 3 月 2 日、3 日に実施した国際研究集会の研究成果であり、『多言語化する学校と複言語教育–移民の子どもたちの教育支援を考える』（明石書店 2022 年）は 2019 年 3 月 9 日の国際研究集会の研究成果である。前者は CEFR の批判的受容に関わる論考であり、後者は CEFR の唱導した複言語主義が移民の子どもなどに向けて学校教育のなかでどのように展開していったのかに関わる論考を集めた論集で、これまでの研究成果を統合している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　12件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 西山教行
２．発表標題 多言語とカリキュラム計画：複言語主義の観点から「多言語教育の意義とは？」
３．学会等名 外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム（ゲーテ・インスティトゥート東京など（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mayo Oyama
２．発表標題 La competence de mediation dans l ’ enseignement des langues : entre reception, interpretation, polemique et mise en pratique. Perspectives internationales
３．学会等名 Journee d'etudes GEPE, Sur la mediation: reflexions d'un point de vue japonais（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mayo Oyama
２．発表標題 Evolution des competences plurilingues et pluriculturelles au moyen de la didactique integree
３．学会等名 Colloque international conjoint: L'enseignement du francais en Asie-Pacifique : traditions et tendances（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大山 万容
２．発表標題 アイルランドの言語教育政策におけるCEFRの受容
３．学会等名 第21回日本言語政策学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大木　充
２．発表標題 CEFR一般とその増補版で明らかになったことについて
３．学会等名 文化庁（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大木　充
２．発表標題 CEFRの評価水準「共通参照レベル」の用い方 ― 「画一化のパラダイム」vs.「多様化のパラダイム」 ―
３．学会等名 明治学院大学FDフォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 西山教行
２．発表標題 複言語主義のアプローチによるフランス語教育
３．学会等名 北海道大学国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 NISHIYAMA Noriyuki
２．発表標題 Rencontre avec le francais comme experience postcoloniale
３．学会等名 Institut universitaire d'Enseignement du Francais langue Etrangere (IEFE) a l'universite Paul Valery（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 NISHIYAMA Noriyuki
２．発表標題 Comment sensibiliser la diversite linguistique et culturelle en faveur de l'enseignement / apprentissage du francais ?
３．学会等名 XIIe Forum francophone du pacifique (La Nouvelel Caledonie)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 NISHIYAMA Noriyuki
２．発表標題 L ’ interculturel dans la societe japonaise, d ’ hier et d ’ aujourd ’ hui
３．学会等名 cours de licence de semiologie de Elatiana Razafi (universite de la Nouvelle Caledonie)（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Monika Szirmai & Margit Krause-Ono
２．発表標題 The CEFR and the Companion Volume: Culture and related issues
３．学会等名 JALT OLESIG７Conference　久留米（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Monika Szirmai & Margit Krause-Ono
２．発表標題 The CEFR and the Companion Volume
３．学会等名 岡山JALT（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Monika Szirmai & Margit Krause-Ono
２．発表標題 The CEFR and the Companion Volume: A critical view
３．学会等名 全国語学教育学会・第45回年次国際大会教材展示会 JALT2019 名古屋
４．発表年 2019年

１．発表者名 Monika Szirmai & Margit Krause-Ono
２．発表標題 Beyond the Can-Do lists: What is the CEFR Companion Volume?
３．学会等名 広島JALTWorking together, Learning together学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Monika Szirmai & Margit Krause-Ono
２．発表標題 An overview: The Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR) and the Companion Volume
３．学会等名 Hiroshima ALT Skills Development Conference（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 西山教行，大木　充（編著）	４．発行年 2021年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 228
３．書名 CEFRの理念と現実-CEFRの理念をめぐって	

１．著者名 西山教行，大木　充（編著）	４．発行年 2021年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 218
３．書名 CEFRの理念と現実-CEFRの実践をめぐって	

１．著者名 大山万容，清田淳子，西山教行	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 182
３．書名 多言語化する学校と複言語教育-移民の子どもたちの教育支援を考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『ヨーロッパ言語共通参照枠』に関する 批判的言説の学説史的考察
https://noriyukinishiyama.com/kaken2018/
西山教行研究室
https://noriyukinishiyama.com
『ヨーロッパ言語共通参照枠』に関する批判的言説の学説史的考察
http://www.flae.h.kyoto-u.ac.jp/kaken2018/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	Ｓｚｉｒｍａｉ　Ｍｏｎｉｋａ (Szirmai Monika) (20275986)	広島国際大学・健康科学部・教授 (35413)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大山　万容 (OYAMA Mayo) (40773685)	立命館大学・言語教育センター・非常勤講師 (34315)	
研究分担者	大木　充 (OHKI Mitsuru) (60129947)	京都大学・人間・環境学研究科・名誉教授 (14301)	
研究分担者	クラウゼ小野　マルギット (ONO Margit) (70400059)	室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授 (10103)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会 国際研究集会「ひとつの言語教育から複数の言語教育へ：CEFRからみた日本語，英語，外国語教育の連携と協働」	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 CEFRの理念と現実	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 多言語化する学校とバイリンガリズム－フランス，カナダ，日本	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関